
主役のいない夢の国

さばの味噌煮缶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

主役のいない夢の国

【Nコード】

N6176Y

【作者名】

さばの味噌煮缶

【あらすじ】

突然退場してしまった主役の大騒ぎの共演者達。幕を閉めたくない彼らがとった行動は、新しい主役を早急に用意すること。そうして奇天烈な舞台に無理やり上げられた少女は――。幕を閉めたくない共演者達と幕を降りたい新しい主役の攻防。

主役退場

大変だ！ 大変だ！ 白兔は叫び散らしながら走り回っている。
北へ南へ東へ西へ。忙しく短い二本の足を動かして、ついでに
口も動かして。

でも誰も白兔を気にもとめやしない。

だって彼はいつだって遅刻だなんだと叫び散らしながら走り回っているから。

でも今日は違ったようで。壊れた人形みたいに大変だと叫び散らす白兔を捕まえて、金色の瞳の猫は尋ねました。

何がそんなに大変なのか。
すると白兔は言いました。

大変だから大変なんだよ！ アリスが！ ぼくらのアリスが死んじやったんだ！ 白兔は力いっぱい叫びました。

その声は猫が兔を捕まえた森中に響き渡り、そして瞬く間に小さな夢の国中に広まりました。

アリス。夢の国を創り上げた愛すべき少女。この国で最も愛され、大切にされる主役の突然の退場に、夢の国はてんてこまい。

だって夢の国はアリスの夢で出来上がっていたのです。夢の国のもとなる夢を作るアリスがいなくなってしまうえば、やがて夢を失った夢の国は消えてなくなってしまう。

夢の国の住人たちは考えました。

消えたくない。

でも、アリスを失った今、消滅は間近に迫っていました。

夢の国には不似合いな悲壮感が国中に満ちる中、一人が声たからかに言いました。

アリスがいなくなってしまうのなら、新しいアリスを用意すればいい。ぼくらの為に、この国の為に夢を作る少女を、新しくこの国に迎えよう。

一人の言葉に、皆が賛成しました。

それからとん拍子に話は進み、残る問題は唯一つ。

どうやって新しいアリスを夢の国に迎え入れるか、だけになりました。

そこで、それまでじつと黙って話を聞いていた金色の瞳の猫が手を上げました。

俺に考えがある。俺が新しいアリスを迎えに行こう。

退屈を好んだ女

あるところに、退屈を好む女がいました。

女は変化や忙しさを極端に嫌い、毎日同じことをして過ごす事を幸福と捉えていました。

毎日同じ時間に起き、同じ時間にご飯を食べ、同じ時間に本を読み、同じ時間に遊び、同じ時間に寝ました。

そうして毎日同じことの繰り返し。

どうしたって退屈な日々が、女にはとてもない幸福だったのです。

女の願いはこの退屈な毎日が変わらずに続くことでした。

いつまでも、それこそ死ぬまで、女は退屈でありたいと願っているのです。

そんな女のところに、突如としてそれはやってきました。

それは黒く美しい毛並みの、金色の瞳の猫でした。

猫は女を見つめ、そして言いました。

夢の国に来れば、何でも願いが叶う。

それはとても魅力的な言葉でした。何でも願いが叶う。つまり、

女は永遠に退屈な日々を手に入れることも出来るのです。

しかし女は悩みました。

そもそも、猫がしゃべるだなんておかしい話です。

それは女の望む変化のない退屈な日々とかけ離れていました。

女は退屈が何より好きです。退屈をもたらすのは何の変化もない、同じことを繰り返し返す日常だと知っています。

女は猫を無視して普段どおりの退屈な日常を楽しみました。

しかし猫は諦めません。

来る日も来る日も女の前に現れ、あの手この手で女の気を引こうとします。

ある日、女はとうとう我慢できなくなり、日常に紛れ込んだ異物

である猫の首を裁縫鋏で切り落としてしまいました。
切ってから、女は激しく後悔しました。

こんなことは日常ではない。

私の求める退屈はどこへ行ってしまったのだろう。

しかし、同時にこうも思いました。

首を切り落とすのはなんとという快感か。

私は退屈以上に、首を刎ねる行いを好んでいるのかもしれない。

退屈以上の幸福を見出した女は、胴体から切り離された猫の頭に
言いました。

お前、私の願いが何でも叶う国に連れて行ってくれるのでしょうか。
すると首だけになった猫が大きな口で笑いました。

ああ、そうだとも。一緒に行こうじゃないか。

女は猫の首と胴体を持つて夢の国へやってきました。

女は夢の国の真ん中に大きなお城を建てて、そこに暮らすことに
しました。時折、城を出ては城の外で出会ったモノの首を無差別に
刎ねて歩き回り、首を持ち帰ってお城の廊下に飾りました。

退屈を好んだ女はやがて夢の国でこう呼ばれるようになりました。
首狩り女王ってね。

学者肌の女

あるところに、とても夢見がちな女がいました。

女はいつもここではないどこかを求めている、ここではないどこかへ行くために沢山の本を読んでいました。

そうして自分の頭の中に作ったここではないどこかのために沢山の知識を本から吸収し、女はとても頭の良い人間になりました。

しかし女の考えは変わりません。

いつだってここではないどこかを求めています。

いつだってここではないどこかのために本を読みます。

こつこつと勉強をして、知識を身につけ、実験をして、経験を身につけます。

でもそれらは全て、彼女の頭の中にあるここではないどこかのためです。

女は他者と接することを苦手としていました。

本当は嫌いだっただのかもしれませんが。

本と頭の中のここではないどこかだけを愛し、他を切り捨てていた女には、家族の絆も友情も愛情もありませんでした。

女にあるのは知識を得ること、ここではないどこかをより豊かにすることへの執着だけ。

ある時、女のもとに一匹の猫が尋ねてきました。

女は猫に知り合いなどいないと門前払いをしますが、猫はそれから毎日、女のもとに現れます。

何処からともなく、まるで建てつけの悪い壁の隙間から遠慮なしに入り込んでくる隙間風のように。

女は最初、猫を追いつつとしました。

摘み上げて外に放り投げたり、猫の嫌いそうなものを玄関に置いたりしました。

それでも猫は何処吹く風。そ知らぬ顔で女のもとに現れます。

それがあんまりしつこいので、女は安心して本も読めません。

本が読めなければ知識を得ることも出来ず、知識がなければここではないどこかを豊かにすることは出来ません。

困り果てた女は考えました。

女は一度、猫と話をすることにしたのです。

どうして自分の読書を邪魔するのか。考えてもわからないので、本人に聞いてしまおうと思ったのでした。

すると猫は、待っていましたと言わんばかりに大きな口を歪ませて笑いました。

ここではないどこかへ、貴女をご招待します。

猫の綺麗に並んだ歯がカチカチと音を立てます。

女は尋ねました。

ここではないどこかとはどこでしょう。

猫はまたも笑います。

ここではないどこかとはここではないどこかです。

女は尋ねました。

そこに本は沢山あるかしら。

猫はまた笑います。

貴女が望むものは望むだけ。

女は猫に案内されるままに、ここではないどこかへ向かいました。そこは女にとって夢のような国。

お金がなくなつて、女が望むだけ、望んだものが与えられる世界。女はここではないどこかで沢山の本に囲まれています。

ここではないどこかで一番の物知りになるために、沢山の本を読み続けます。

もう、女の頭の中にここではないどこかはありませんが、女は本を読み続けます。

女はここではないどこかへ来てしまったので、頭の中のここではないどこかは必要なくなってしまったのです。

ここではないどこかを豊かにするためでなくとも、女は本を読み

続けます。

女は他にすることもなくて、出来ることもしないのです。

女はいつしか、ここではないどこかでこう呼ばれるようになりました。

本の虫、キャベツを食べ荒らす幼虫のように本を読みあさる青虫ってね。

無関心な女

その女は周囲が呆れるほど無関心な女でした。
何に無関心かというと、自分にです。

年頃の女だというのに、他の女たちが競い合うように自分を磨くその隣で、女はいつも忙しく働いていました。

他の女たちが朝一番にお気に入りの洋服を選んで、丹念に時間をかけて化粧をする間は、新聞を配達します。

他の女たちが楽しいおしゃべりに時間を費やしている間は、近所のレストランの皿を洗います。

他の女たちがめいっぱい着飾って恋人と出かけている間は、近所の店の掃除をします。

他の女達が今日をめいっぱい楽しんで家に帰るころ、内職の造花をつくります。

そうして一日中働いて、質素なご飯を食べて眠るのです。

その女は、汚れが目立たないからいつも黒い服を着ています。

その女は、どうせ汚れてしまうのだから何を履いても同じだといつも黒い靴を履いています。

その女は、どうせすぐに乱れてしまうんだからいつも髪を丁寧に結いません。

その女は、すぐに汗で流れてしまうのにもつたいないといつても化粧をしません。

そばかすだらけの顔に、無造作にはねた髪、日焼けした肌に黒い服と靴、指には沢山の絆創膏と手のひらで潰れた肉刺。

その女はとても美しさから程遠い形をしていました。

街を歩けば着飾った女たちがくすくすと笑いながら通り過ぎてゆきます。

それも日常の一部だったのでその女は全く気にせず、仕事に励みました。

夕日が街を赤く染める中、家路を辿る女の前に、一匹の猫が現れました。

金色の瞳の黒猫です。

猫は女の真正面に座って動こうとはしません。

女は気まぐれに、猫の前にしゃがみ込み、手を伸ばしました。

野良猫だと女が思っていた猫は、人を恐れないのか、女の手から逃げようとはしませんでした。

まるで置物のように女を見つめたままびくりとも動きません。

女はそんな猫の額を指でちよんとつきました。

女は言葉を失いました。

ちよんとつかれた猫の頭は猫の首からぼろりと落ちて、そのまま後に転がっていったのです。

そしてそのまま猫の頭は路地の暗闇に消えてしまいました。

困惑と恐怖で言葉を失くした女に、残った体が言いました。

頭が離れて逃げてしまった！ お前の責任だ、猫の額を指でちよんとつくなんて。

女は更に困惑し、ただただ呆然と残った体を見つめます。

そして残った体は続けます。

猫の額を指でちよんとついてはいけないことも知らないなんてな
んという無知！ お前の愚行でいなくなった頭をさあ探せ！ さもなくばお前の頭を貰い受ける。

すつと起き上がった残った体は女の抱える空のバスケットの中に飛び込みました。

そしてバスケットの中から尻尾だけを出して、こう言いました。

早く頭を追いかける！ 不思議の国への扉はすぐそこにある。

困惑と恐怖で言葉を失くした女は、全く訳が分からないままに、残った体に急かされるまま路地の暗闇に飛び込みました。

途端に地面がなくなつて、女は残った体入りのバスケットを抱えたまま、深い深い穴の底へ落ちてゆきます。

落下の恐怖からきつく目を閉じた女の耳に、どこからともなく声

が聞こえました。

さあ役者が揃ったぞ！ カーテンコールにやまだ早すぎる、さあ
さあ準備だ開幕だ！ 夢の続きの幕開けだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6176y/>

主役のいない夢の国

2011年12月20日03時10分発行